

〈研究ノート〉

文化言語学から見た中国語学教育における数詞の用語用例に関する一研究

水 原 寿 里

一、はじめに

言語と文化は深い関連がある。言語は文化の形の一つであり、符号象徴の一つである。文化は言語の軌道である。まるで家族の家譜・家系・家柄・親子の相互関係である。文化を表現するには必ずしも言語だけにたよるのではない。文化を表現するかたちとして、他に音楽や絵画や彫刻や舞踊や建築などさまざまな分野がある。言語も単に文化の形で存在している。言語とは一つの民族における歴代の知恵の積み重ねである。また言語は、その民族における長期間に渡る創造的な活動の成果の一部分である。即ち、文化の結晶体とも言える。言語は知恵の宝庫であり、一民族の精神的な財産である。いわゆる、言語も文化現象の一つである。異なる民族の言語には異なる民族の特定の文化涵養の内容が記録されている。ことわざに「十里不同風 百里不同俗」の表現があるように地域や場所が変われば、風俗習慣も異なる。日本語にも「所変われば品変わる」のことわざがある。英語にも「So many countries, so many customs」がある。ことばは、自然環境、生産労働、生活習俗と深く関係している。それゆえ、言語学習者は言語と文化の関係を重要視しなければならない。なかでも「数」は古代中国人の世界観において、とても重要な部分である。中国古代の哲学者たちの学説・理論展開において、「数」の使用がよく見られる。『易経』にも「数」を使う言葉がた

くさんある。中国古代の甲骨文、金文、竹簡、木簡にも、「数」のことはよく見られる。『庫方二氏藏甲骨卜辞』の記載に「婦好三千人、旅一万人、共一万三千人。」（婦女子三千人、旅人は一万人、合わせて一万三千人。）とある。この記録のように、商代の甲骨文に見られた数は一万とか三千とかである。

日本人の野球選手たちは背番号に対するこだわりがとても強い。例えば長嶋監督の背番号は3番で、野球ファンは、その「3番」の魅力・魔力に魅せられ、長嶋にロマンを感じる。また、偶像化し、歓喜する。王貞治監督の背番号1番は、野球ファンにとって、輝かしい番号で、「1番」と言ったら、王監督の栄光が思い浮かぶ。また、松井選手は55番を使っており、アメリカン・大リーグのチームに入ったが、その「55番」から「ゴジラ」のニックネームになり、世に知られている。有名なスポーツ選手たちは皆それぞれの代表的象徴的な背番号を持っている。

日本人は奇数の一、三、五、七を好み、冠婚葬祭に際してのご祝儀或いは御香典の袋に包むお札の枚数は奇数である。中国人は偶数の二、四、六、八を好み、冠婚葬祭に包むお札の枚数は偶数である。各国の歴史文化の伝承の違い、民族文化の発展により、言語の用法用例における言葉の縁起と禁忌もさまざまなかたちで表現される。使い方を間違えたら、大変なことになる。中国においては、古代の易経の占いに神秘的な八卦を用い、天文観測や天象予測などを行っている。いわゆる「術数」或いは「数術」と称する。また数詞の発音により縁起をかつぐ言葉になり、吉兆を表す。数字の八の書き方が下の部分が広がっていくことにより、末永く大きくなる意味を表すなど、数字には深い意味がある。また、広東省の商売上手な人たちから見て「八」の発音の「ba」（粵語音では pa : tsɔ）が財産が増えるという「發」の「fa」の発音に似ている（すなわち粵語音でも疊韻で入声韻）ことで、縁起のいい数字として使われている。数字の表面的に表れる意味とその深層にある内容が、その言葉に関わる文化と深く関係している。数・数字・数詞などの異なる言い方があるが、すべて言語文化の中の重要な存在であり、言語の中の数詞の使い方により一層その言語使用者の考え方や人生観や哲学思想の表現がはつきりする。すなわち、数詞が文化における応用性により、文学から

芸術、歴史、哲学、心理、社会、コミュニケーション、方言、風土、習慣などさまざまな面で、深く関わっている。

中国古代の道教創始者老子は数をもって宇宙の根源を追求している。例えば、『老子』「道德経」に、「道生一、一生二、二生三、三生万物」（道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ずという意。）という言葉がある。

本稿では、まず、数詞「〇」及び「一」について、考察する。「二」以後の数詞については改めて考察を進める予定である。

二、中国語の数詞の発生と数詞における広義と狭義の両面から見た違い

二一、数詞の表現

中国語の数詞の表現には、「小寫」と「大寫」があり、「大寫」は、日本語と同じで、証書の記述などに用いられている。⁽¹⁾「小寫」は、「〇、一、二、三、四、五、六、七、八、九」などがある。「大寫」は、「壹、貳、參、肆、伍、陸、柒、捌、玖」などがある。

「二」は、場合によって、「二」ではなく「兩」を使う。

例：兩千（二千）、兩万（二万）、兩点（二時）、兩個星期（二週間）、兩本书（二冊の本）。

二二、数詞の体系

数詞の体系は、日本語の漢数字と概ね同じで、百の位以上の数に関しては、次のように日本語とは異なる。

(一) 100, 1,000, 10,000…の先頭の1（一）は省略しない。

例：一百、一千、一万、…。

なお、10は、数字の途中にある場合のみ1(一)をつける。

例：一百一十一(111)。

(二) 途中の0がある数は、○または零を補う。(ゼロが連続する場合も零は一つのみ補う)。

例：一百零一(101)、一千零一(1,001)

(三) 0で終わる数は、最後の単位を省略できる。

例：一百一「十」(110)

ただし、途中に0がある場合は、省略できない。

例：一千零一十(1,010)

三桁ごとの位取りには「」を、小数点には「」を使う。

二一三、数詞に関連する用語例⁽²⁾

通常は、漢数字、アラビア数字が用いられる。

序数の表現方法には、助数詞(個、枝、把などの、数を表す語に付ける接尾語)が多く、日本語と同じような特徴がある。

二一四、漢数字

漢数字とは数を表記するのに使われる漢字で、十進法の数詞及び位取り記数法で用いる。前者は漢字文化圏内で相違がある。

漢数字には零から九を表す数字、一〇の冪を表す位の字、それらを合わせた複合字がある。複合字は現在では使わ

れていない。

以下に漢数字を示す。これらの字は〇（零）を除き、甲骨文字の時から使われており、意味には変化はない。ただし、四と万は字形が変わっている。

三、日本の数詞

三―一、和語の数詞表現

日本語の数詞には、原日本語に由来すると考えられている固有の和語の数詞（ひとつ、ふたつ、みつ、…）と、漢字とともに中国から持ち込まれ日本語化した漢語の数詞（いち、に、さん、…）の二つの系列の数詞が併用されている。

ただし、現代日本語で和語の数詞が普通に用いられるのは「ひとつ」（一）から「とお」（十）までに限られ、数としては「はたち」（二十）が年齢について専ら用いられるに過ぎない。本来は数（あるいは個数）を表わした「みそじ」（三十）、「よそじ」（四十）などには「三十路」、「四十路」という漢字が当てられ、「じ（ぢ）」が年齢を表す助数詞（単位）である「歳」または「歳代」を意味する接尾辞のように誤解されている。あるいは、「はつか」（廿日）、「みそか」（三十日）のような形（カは、複数のヒ〔日〕をあらわす）、さらには、「いすず」（五十鈴、「い」が五〇という意味の数詞）、「ちとせ」（千年、千歳、「ち」は一〇〇〇の意味）などの形で、多くは固有名詞の中で痕跡的に用いられるのみである。「ひとつ」から「とお」までの和語の数詞のなかには、母音交替により二倍を示すものがある。すなわち、ヒ（一）―フ（二）の対、ミ（三）―ム（六）の対、ヨ（四）―ヤ（八）の対である。イツ（五）―ト（十）を加えることもある。

三―二、和語数詞の体系

本来、和語の数詞で数そのものの概念を表わしているのは「ひと、ふた、み、よ、…」の部分であると考えられる。しかし、実際にはこの部分が単独で用いられることはなく、数または個数を表わす場合には「―つ」などの接尾辞を伴って、「ひとつ、ふたつ、みつ（みつつ）、よつ（よつつ）、…」という形で用いられるか、具体的な接尾辞または助数詞を伴って、「ひとり、ふたり、みたり（みつたり）、よたり（よつたり）、…」、「ひともと（一本）」、「ふたまた（二又）」、「みとせ（三年）」、「よっか（四日）」、「やくさ（八種）」などという形をとる。

さらに十を超える数については、「とおか・あまり・みっか」（十三日）、「みそとせ・あまり・なとせ」（三十七年）、「よそじ・あまり・みつつ」（四十三個）などのように、桁ごとに接尾辞または助数詞を繰り返して言う方法しなく、非常に冗長だった。なお「みそひともじ（三十一文字）」などの語は、このような和語系の数詞本来の体系が崩れた後に、漢語系数詞の体系に合わせて生じたものとされる。³⁾

これに対して漢語の数詞は、「十・三」（13）、「三十・七」（37）、「二千・七百・六十・八」（2768）などと言うように単純かつ体系的であり、「日」、「年」、「個」などの助数詞は末尾に、一度つければよいという合理性を持ち、また極小から極大まで、あるいは分数表現や割合表現、倍数表現などについても整然とした体系を持っている。このことが、現代日本語での和語系の数詞の使用が一〇十に限られ、十一以上はもっぱら漢語系の数詞が使用されるようになった原因と考えられている。

三―三、和語系の数詞

現代日本語においては一〇以下であつても、「みたり」（三人）などのような表現はほぼ消滅し、「ひとよ」（一夜）という表現も非常に古風な物言いと感じられる。時間あるいは期間としての一日を和語系数詞で「ひとひ」と呼ぶこ

とは現代日本語ではほとんどなく、漢語系の「いちにち」という言い方しか行われない（月の第一日を「ついたち」と呼ぶのは「月立ち」の音便形である）。なお、四、七については漢語の「し」、「しち」ではなく、和語の「よん」、「なな」が標準になっている。

四、言語文化における数詞「〇」、「零」の用法用例について

他の漢字と異なり「〇」は新しい字であり、唐より前には現れない。後漢に完成した九章算術には「（引き算の時）同符号は引き、異符号は加える。正を無入から引いて負とし、負を無入から引いて正とする」とある。⁴⁾

この「無入」とは0のことであるが、専用の字ではなく、表記には空白を用いていた。

唐の武則天（在位：六九〇年～七〇五年）が制定した則天文字に「〇」が現れるが、これは「星」の代替字であり0の意味はなかった。なお則天文字には、このように楷書的ではない形の字がいくつかある。⁵⁾

七十八年、太史監（天文台長）の瞿曇悉達が九執曆を漢訳し、〇を点で記すインドの数字を導入した。しかし算木を用いていた中国の天文学者や数学者は受入れなかった。⁶⁾

また新唐書（一〇六〇年）は三二〇一および〇を「三千二百一」、「空」と記している。⁷⁾ この「空」は仏教の空と同じく、サンスクリット語のシューニヤの訳語である現在も韓国語とベトナム語は「空」を「〇」の意味に用いる。また江戸時代の和算家も〇を「空（くう）」と呼んでいた。

南宋時代、蔡元定（一一三五年—一一九八年）は律呂新書の中で、一一八〇九及び一〇四九七六を「十一万八千〇九十八」、「十〇万四千九百七十六」と書いている。⁸⁾ この「〇」は、以前から欠字を示すのに使われてきた記号、虚欠字である（中国語版：虚缺号）。秦九韶の数学九章（一二四七年）では、算木数字で空位および〇に「〇」を用いている。この「〇」は「〇」が変化したものであり、アラビア数字の「〇」を借用したのではない。⁹⁾

ただし、「□」はインドの数字のゼロに触発された可能性がある。一方「零」は『説文解字』にも出ている古い字だが、もともとは小雨（零雨）を意味し、あとわずかな量（制裁、零余）の意味にもなったが、○の意味はなかった。また、孫子算経（四世紀頃）では「零」が余りの意味で使われている。李治は、測園海鏡（一二四八年）の中で一〇二四を「一千〇二十四」、二二二〇三〇二を「二百二十二万零三百零二」と書き、「〇」と「零」を同一視している。¹²⁾

現在、位取り記数法では主に「〇」を使う。熟語は必ず「零」を用いて、「零下」、「零封」とする。中国語では百位、千位の一を読む。また、五〇三は「五百三」ではなく「五百〇三」と読む。この「〇」の挿入は南宋以来の習慣である。「五百三」と言うと、「五百三十」の省略すなわち五三〇の意味になる。「〇」は「とんで」の意味なので、〇が続いても一回だけ読む。例えば五〇〇三は「五千〇三」であり、「五千三」ではない。なお、春秋戦国時代までの中国語では、各桁の間に「と」を意味する「又」や「有」を挿入した。論語では一五は「十有五」と書かれている。数字を粒読みする時は、通常は一を言い替える。軍隊や航空、鉄道では、さらに特殊な音がある。

五、言語文化における数詞「一」の用法用例について

「一」「二」「三」、および古字の「三」は、それぞれ一本、二本、三本、四本の指または棒をしめした指事字である。これらを「十」「廿」「卅」「冊」の甲骨文字と比べると、横か縦かの違いだけである。これらから、算木の横式と縦式を記したものだとも言われる。¹³⁾ もしそうなら、算木の歴史は殷にまで遡ることになる。また、古い異体字に「弌」「弌」がある。なお、「弌」を義符、「貝」を義符とする形声字が「貳」であり、それが変化して「貳」になり、さらに簡略して「弌」になった。

(一)「一日千秋」。一日会わなければ三秋（三年）も会わなかったように思慕の情がはなはだしく起きる意。

(中)「一日三秋」。

(二)「一網打尽」。網を一度打ってそこにいる魚を全部、すなわち、目的のものを一度に、残らず捕まえること。

(中)「一網打盡」。

(三)「一挙兩得」。一つのことによって二つの利益をあげること。

(中)「一挙兩得」。

(四)「一か八か」。結果がどうなるか検討もつかないが、運を天に任せて思い切ってやってみること。

(中)「孤注一擲」。

(五)「一難去つてまた一難」。災難を切り抜けてほっとしたところへ別の災難が降りかかってくること。

(中)「一波未平、一波又起」。

(六)「一蓮托生」。死後善人は極楽に蓮の花に座るが、私たちも死んでも一緒に一つの蓮の花に座ろうということ。

(中)「一蓮託生」。「同甘共苦」。「一朝天子一朝臣」。

(七)「二年の計は元旦にあり」。一年の計画は年の初めの元旦に立てるべきだという意。

(中)「一年之計在于春」。

(八)「一塵も染まず香り骨に到る」。少しも悪習に染まらない、非常に清潔なことをたとえていう。

(中)「一塵不染」。

(九)「一文惜しみの百失い」。僅かな金銭を出し惜しんで後で大損をすること、気付かないの意。

(中)「因小失大」。

(十)「一髪千鈞を引く」。一筋の髪の毛で千鈞の重さの物を引くということから、極めて危険なことをするたとえ。

(中)「千鈞一髪」。

(十一)「男子の一言金鉄の如し」。男子の一言は金より勝る。

(中)「君子一言、駟馬難追」。

(十二)「人は一代、名は末代」。人間は死後、名前が残るから、恥知らずな行いをするなどといういましめ。

(中)「人生一代、名垂千古」。

(十三)「竜生九子」。一匹の竜から九通りの子が生まれ人にはそれぞれ個性があるということ。「十人十色」。

(中)「一竜生九子、各有各別」。

(十四)「一法を立つれば、一弊を生ず」。一つの法律を作れば、一つの弊害が生れるということ。友人が一人多ければ、それだけ危険も多い。

(中)「多一個朋友、多一個危険」。

(十五)「各人頭上に一個の天」。それぞれの人の頭の上に一つ点がある。「運はそれぞれ」という中国のことわざ。

(中)「各人頭上、一片天」。

(十六)「精神一到何事かならずらむ」。精神を集中して物事に当たればどんな難事でもできないことはない。

(中)『朱子語類』「陽気発処、金石亦透、精神一到、何事不成」。

(十七)「斗南の一人」。天下第一の人。斗南は、北斗星より南の意である。

(中)唐の狄仁傑が、その賢を「北斗以南一人而已矣」と称せられたという『唐書―狄仁傑伝』の故事。

(十八)「昔千里も今一里」俊英も年をとれば凡人に劣るということ。

(中)「麒麟千里、老後却不如驚馬一里」。

(十九)「一言以ってこれを蔽う」。たった一言で全体の意味を言い尽くす。

(中)『論語―為政篇』「詩三百、一言以蔽之、曰、思無邪」。

(二十)「一将功成り、万骨枯る」。一人の将軍が輝かしい功名を立てた陰には、戦場に屍を晒す多くの兵士の犠牲が

あつた筈である。功名を徒に指導者だけのものとするものではない。

(中)「一将功成、万骨枯」。

(二十一)「一寸の光陰軽んずべからず」。僅かな時間も無駄にしてはいけない。

(中)「一寸光陰不可軽」。

(二十二)「乾坤一擲」。全唐詩劉邦運命を懸けて乗るか、反るかの勝負をすること。

(中)『全唐詩—劉邦』「乾坤一擲」。「孤注一擲」。

(二十三)「一字千金」。詩文の表現や筆跡などを尊重して言う言葉で、一文字だけで千金もの価値があること。

(中)『史記—呂不韋伝』「一字千金」。呂不韋が「呂氏春秋」を編集した時、一字でも添削出来た者には千金を与えようといった。

六、むすび

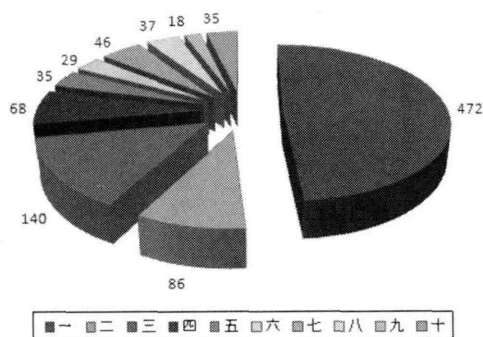
日本の数詞には、二種類あり、中国から伝わってきた「いち、に、さん、し、…」の数詞と、日本で生まれた「ひとつ、ふたつ、みつ、よっつ、いつつ、むっつ、ななつ、やっつ、このつ、とお」がある。

この日本数詞は日本古来のものと考えられている。日本語のルーツは分からないが、日本、韓国、ベトナムといった漢字文化圏の数の数え方は中国からの影響が強く認められている。

生活の中には、数は不可欠のもので、文化を伝えるうえでも、比較する道具として使い、経済動向を示すのにも使われ、あらゆる分野で数字に出会う。いつまでも数字を有意義に使用していきたい。

次に、事典の中で、「一〜十」までの数字を使った言語の数について調べてみると図のようになった。日本語の中では一番、「一」の数が多く使われている。日本人の初物好きが現れているのではないだろうか。

る。本稿では、紙面の関係で、数詞の内の「零」と「一」について、考察したが、次回はその他の数詞について考察する。
(文化女子大学准教授)



註

- (1) 朝倉摩理子著、『驚くほど身につく中国語』、高橋書店、一九九九年。
- (2) 王紅旗著、『中国伝統文化叢書「数字」』、中国对外翻訳出版会社、二〇〇二年。
- (3) 亀井孝、『数詞言語学大辞典』六、東京三省堂、一九九五年。
- (4) 王青翔著、『算術を超えた男』、東洋書店、一九九九年。
- (5) 王青翔著、『算術を超えた男』、東洋書店、一九九九年。
- (6) 錢宝禧著、『中国数学史』、北京科学出版社、一九六四年。
- (7) 歐陽修著、『新唐書』志第二十上 曆六上、一〇六〇年。
- (8) 蔡元定編纂、南宋「律呂新書二」、十二律之實第四、一一九八年。
- (9) 錢宝禧編纂、『中国数学史』、北京科学出版社、一九六四年。
- (10) 王青翔著、『算術を超えた男』、東京東洋書店、一九九九年。
- (11) 戴震編纂、『孫子算経』、西暦四〇〇年。
- (12) 王青翔著、『算術を超えた男』、東京東洋書店、一九九九年。
- (13) 白川静編纂、『字統』新装普及版、平凡社、一九九九年。

参考文献

- 一 李敏生『漢字哲学初探』、社会科学文献出版社、一九九七年。
- 二 催希亮『中国人文世界与熟語漢語』、北京語言文化大学出版社、一九九七年。
- 三 居閔時『中国象徵文化』、上海人民出版社、二〇〇一年。
- 四 万建中『禁忌与中国文化』、人民出版社、二〇〇一年。
- 五 邵敬史『文化語言学中国潮』、語文出版社、一九九五年。
- 六 曲彦斌『民俗語言文庫——神秘数』、河北人民出版社、一九九七年。
- 七 王晓澎『数字里的中国文化』、團結出版社、二〇〇〇年。
- 八 張宇平、姜艶萍『于年湖「現代文化語彙叢書」——委婉語』、北京語言文化大学出版社、二〇〇〇年。
- 九 劉中富『現代文化語彙叢書——秘密語』、新華出版社、一九九八年。
- 十 宋業謹『現代文化語彙叢書——吉祥語』、新華出版社、一九九八年。

十一 張美霞『説字釈詞談文化』、北京語言文化大学出版社、二〇〇〇年。

十二 ことわざ出典一覧

・『易経』中国春秋時代。文王。周公。占書。

・『淮南子』中国前漢時代。淮南王劉安作。文化百般にわたる諸説を集めたもの。

・『漢書』中国後漢時代。班固、班昭作。『史記』に習った前漢の歴史書。

・『毛吹草』江戸時代の俳諧書。松江重編。

・『源平盛衰記』鎌倉時代。二条天皇時代から安徳天皇時代までの源氏と平家の争乱が描かれている。

・『左伝』中国春秋時代。砂丘明作。『春秋』史書の史実を補い、解説。

・『史記』中国前漢時代。司馬遷編。太古から前漢の武帝に到るまでの優れた人達の業績を纏めた歴史書。

・『詩経』中国周代。殷から春秋時代に作られた詩集。中国最古の詩集。